

文部科学大臣 萩生田光一 様
文化庁長官 宮田亮平 様

今回の件に直面して、私は、芸術や文化行政の根本と歴史について思い起こさせられました。

それは、芸術文化が、洋の東西を問わず歴史的に、権力や権威の誇示と不可分なものであった時代が長く続いた、ということです。

封建的社会の文化行政は、政治的であれ宗教的であれ、権力のプロパガンダの役割がありました。そもそも「個人」という概念がありませんでした。

それが近代の人権思想の成熟のなかで初めて、「個人の表現」という考えが生まれて、民主主義社会の文化行政が、それを支援するものになっていったのです。

また美術館や公的な美術展の役割も、市民が、自由で多様な表現を享受する権利を守るためのものになりました。それは時代の流れのなかで自然になったのではなく、多くの市民の自由と人権獲得への努力があつてこそです。

今般のあいちトリエンナーレの「表現の不自由展 その後」へのバッシングや脅迫行為、それに同調するような河村名古屋市長ら複数の政治家の言動、展示の中止、そして今回の文化庁のあいちトリエンナーレへの補助金交付の取り消しに至る過程には、民主主義社会と表現の自由への「挑戦」、そして権力のプロパガンダではない自由な「個人の表現」を受け取る権利を有する主権者に対する「挑戦」を感じます。

これは歴史の針を逆に回していくようなものです。人類が不斷の努力のなかで築いてきた人権上の成果の否定につながるものです。

私にも責任があります。民主主義をになう市民として、アーティストとして、表現の自由を守り続けることを怠ってしまったことを反省しています。

だからこそ今、この一文をしたためています。

萩生田光一様。 宮田亮平様。

不交付の決定を、撤回してください。

与那覇大智

2019年10月7日